



父の遺言

父が、京都の大学病院で死んだのは昭和七年八月二十三日。私は当时小学校2年生であった。

夏休みに入るのをまつて総代さんに手をひかれ汽車で京都まで見舞いに行つた。当時木造の広い病院の一一番奥の特別室に父は寝ていた。その部屋には芝生の広い庭がありて、そこに実験用だらうか山羊が何頭が飼われていて、私は2~3日いた間山羊さんと遊んだことを覚えている。と、もうひとつ私にとって5・6歳したの従姉妹の女の赤ん坊が病室の廊下でギャアギャア泣いていたのを覚えている。

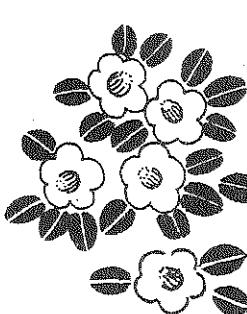
父は高いベットに横たわつたまま、私に言った。「去年貰つてやつた自転車に乗れるようになったかい」。丁度一年前に買つてもらつた赤い色の子供用自転車のことを聞いた。それから父は、遺言のつもりだつたのだろう、厳肅な口調でこんなことを言った。「大きくなつて何にならうとも、決して説教者になるな。わからんことは『門徒のみなさん』に聞けばなんでも教えてくださる。説教する坊主にだけはなるなよ」

85歳越えたいま、父の思いでいうのはこのこと以外には殆どない。が、この父の残したことの教えは、歳を重ねるにしたがつて胸に響いてくる。

父は短い生涯、いわゆる「説教使(布教使)」として生きていた。自分の寺は弟にまかせ年中全国に布教使として出歩いていた。そういう生きざまに父は死を前にして、深く懺悔したのであろう。「『門徒に申しわけなかつた』。蓮如上人も「説教者」にはなるなと戒めている。「聖教よみ(学者)の聖教しらず」と指摘なさる。

「教えてやる」という心中の中に、ついつい高慢心が芽生えてくる。俺は偉いんだという高ぶりと。これだけ教えてやっているのにという人を見下げる」)」蓮如さまはを「我が身あり顔」「心得顔」に戒め。あくまでも人に「問え」「ひとに聞く」と教えた。

歳を重ねるにしたがつて「教えたがりやについなっていく」わたしの日常に八〇年前の父の残した教えが思い出されるのである。



花びらは散つても

中央仏教学院講師 鎌田 ゆふ里

大学時代からお育ていただいた浅井成海先生が亡くなられた。ご往生の数時間前にお見舞いにいった時は、「ありがとう」と意識もしっかりとおっしゃっていたのに淋しいかぎりです。

生前に 足利淨円先生の
ともし火は明きものと今をしる
消えにしあとの夜の暗さに

という歌よく引用してお話をくださいました。

私にとって菩薩さまのような存在の先生でした。生前に住職をしている田舎のお寺でお葬式をしてほしいと仰っていたそうです。週日にお参りしたとき、奥様が「『門徒のみなさんが、お寺の前を通るたびに、前住職に手をお合わせてくださるのですよ』と、うれしそうにおっしゃっていました。先生はお亡くなり

になつても、『門徒の一人ひとりのなかにいつも生き続けていてくださるのですね』。

そういえば三十四年前に亡くなつた金子大栄先生の『意訣歎異抄』の第四章に

花びらは散つても花は散らない

永遠は現在の深みにありて、未来に輝き常住は生死の彼岸ありて生死を照らす光りとなる。

その永遠の光りを感じるのはただ念佛である。

とあります。なんと心が震えるような意訣なのでしょう。言い知れぬ感動を覚えます。

(中略)

大事な方と死別して深い悲しみにくれている方もあるでしょう。この悲しみを乗り越えるには「お聴聞」しかありません。

お聴聞によつて、すでに私が救われている道があることに気づかれるはずです。

亡くなつた方に導かれ、如来とともにある人生だと知らされるはずです。

(西池 哲俊 付記)

鎌田先生は、亡くなられた浅井成海先生を「菩薩さま」のような方だったと言つていま

す。わたしにとつても浅井先生は同じようにお慕い致します。

私が先生にお出合いでできたのは、私が教職を辞したその年からであります。教職にあつたところから私の兄として導いてくださつて

いた山崎一朗先生に勧められ西本願寺の「あんご(安居)」に学んだ頃からです。「安居」

というのはお釈迦様の時代から続いている僧侶の勉強会。現在の本願寺の安居は夏の約二

週間、龍谷大学の本館で開催されていますが

一 月	勝林寺	予定
五 日 (土)	勝林寺	仏事総会
六 日 (日)	大石正和宅	13回忌
一 日 (金)	勝林寺	仏婦評議員会
一〇日 (日)	岸下一郎宅	満中陰法要
二六日 (土)	みのり	聞く会



2011(平成二十三)年 2月1日

〒668-0214 兵庫県豊岡市出石町内町59

およりさん

(寄り講・門徒講)

栗尾 ハ・ト

私のうちは禪宗の山寺の門前坂下に位置しております。私、この地〈栗尾〉に嫁いできましてからはやいものでもう五〇余年にもなります。義父母ともに早く別れてしましましたので、幼い子どもをつねながら、はやくからお年寄りの仲間に入れていただき、いろいろと昔話なども聞かせていただきながら今日にいたつています。

昔は、親鸞聖人のご命日十一月二十八日の前一週間ほどは、毎夜ご門徒の家庭に順次お参りしたと聞きましたが、私がお参りするようになつたころには、一月十六日「ご正忌報恩講」(新暦に直した親鸞さまのご命日)の日だけになつておりました。お昼と夕食を皆さんでいただき、その間、全員でお正信偈(親鸞さまの百)二十句のみほとけの教えを讀んでいました。それがこの栗尾では今でも続けられています。

世代も代わり、世相も全体変わり、食事といふことも廃れてしまつたが、しかしこの年一回の「およりさん」は、せめて足腰のたつ間は続けさせて頂きたいと思っております。

「無縁の時代」とか、同じ村に住んでいても同じ家庭でくらしている者でさえも、その「きずな」が薄れていくことはなんとも淋しく悲しいことです。それだけに私、この「およりさん」を大事にし、次の世代にも伝えていこうと門徒仲間と話し合つております。

出石へ出てお寺参りもしたいと思いながら、この栗尾、バスも通らなくなつてしましました。出石直行便はございません。第一足腰も随分弱つてしましました。

せめては、最寄りのものが、相寄つて「およりさん」をお勧めしたいと思うばかりです。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。

おとうさんが
さいしょに生まれて
次におかあさん

その次ぎ

ゆうやでこうき

さいごに

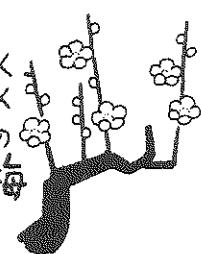
ゆいが生まれたんでしょう

みんな

生まれてきて

よかつたね!

(「ないおん。こころのことば」より)



中嶋 政枝	葬儀
一月二十七日	
出石下 ちよの さま	保谷
八十五歳	坪口

母の臨終

つい先だって、龍野の妹から豪雪見舞いのついでにこんな電話があつた。

「おたあさんが亡くなつた年も大雪やつたなー」

母が豊岡病院の一一番奥まつた隔離病棟の一室で息をひきとつた日は、丁度節分の日で、

但馬は豪雪に見舞われていた。豊岡駅から病

院まで、たしか、叔父(後の父親)におんぶされて雪道を辛苦して病院までたどり着いた。

病院の手前の橋のたもとに祖母と姉妹が待つていて、急いで行けと促した。

私はそのころ眼病がまだ全治していなかつたので、母の臨終の姿はハッキリとは見えなかつた。その私を、母方の祖父が手で押し付けるようにして母の顔に接近させた。そのとき、もう一日も前から何の反応もなかつた母の眼がパッとあいて、なにやら口でものを言つた。しばらくして、祖父が小さくおりんをたたいて「ああ。終わつた」と告げた。

母は何を言おうとしたのか。思いを告げる力も絶えていた母は、ただ、「南無阿弥陀仏。お念佛」をいのちの限りを尽くして残してくれたのに違ひない。

火葬場への行き帰りの道も雪で難波した。その母の単独の写真は一枚も残っていない。父が死んだ後、すぐに亡くなつた弟。その父と弟の墓を勝林寺の境内に建てたときの記念写真。そこから辛うじて取り出して肖像画は作つた。

しかしわたしには、母の面影は、あの臨終のお念佛の声をとおして、丁度、昔、初午の「のぞき」を見るように鮮明に見えて来る。

しかもわたし自身が年をとるにしたがつて…。

蝸牛 角(つの)の争い

蝸牛(かき牛)といふのは「かたつむり」「でんでんむし」。昔、かたつむりの左の角にある触という国と右の角にある蠻(アフリカ)という国が領地争いの戦争をした。結果どちらの国も滅び、跡には両軍の兵士の屍(し체)ばかりが累々と残つた。中国の古典『莊子』にある話。現在でもどこかの国の政治家先生たちも同じジャーンの。

棚から牡丹餅

「おはぎ」と「ぼたもち」の違いは? 実は同じもの。古くは(江戸時代)、棚から落ちてひしゃげた牡丹餅のような「色黒あばた」の「醜い人の顔を嘲り笑つた言葉」だった。現在では、努力しないでいい結果だけを待ち望む今の若者の風潮を揶揄した言葉。人事ではあります。

下駄を預ける

昔、出石の永楽館に芝居がかかっていたころ、履物の下駄を下足札と交換で預けて棧敷に入った。ところでその下足札を無くしたりしたら大変。自分の一身を預けたのも当然、まったく身動き出来なくなつてしまつ。「あなたさまに私の全てをおまかせします。よきようにご指示ください」

青柿 熟柿を弔う

青々と未熟な青柿が、熟して落ちて行く熟し柿をみて、「ご愁傷さま」などと生意気にもあざ笑う風景はどこの職場にも見かける。先輩上司を尊敬せずむしろあざ笑いぎみの現代の若者社員。

薮蛇(やぶへび)

「薮をつついて蛇を出す」の簡略表現。しなくてよいようなことをして、災いを招く。「寝た子を起こす」。「雉も鳴かずば撃たれまい」などもほぼ同じ言葉。